

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日逓送省特別授受認可第三五二號
昭和二十五年五月廿五日印刷 昭和二十五年六月五日發行

浄土

第十六卷 第六號

六月號

一碗の茶

吉田絃二郎

愧づべし、悲むべし

藤井實應

念佛する時の心

松濤誠廉

永遠の微笑

佐山學順

勤行隨想

「願我身淨如香爐……」ある朝の勤行を何氣なく始めたとき、ふと私の心に閃めいたものがある。願我の我とは誰のことなのだ。「一切我今皆懺悔」の我とは。佛を奉請する者は誰。四弘誓で誓願するのは誰。

そういえば日常勤行はすべて第一人稱で現わされている。今さら「我」が誰などと自問することは愚の骨頂かも知れないが私にとつてはそれどころではない。香爐の如くにもなり得ず、懺悔もなし得ぬ身にとつて、何の奉請であり、一體何を誓願するといふのだ。とうとう私は、その朝は、ただ一枚起請文を讀み、お念佛を唱えた丈けで壇を降りざるを得なかつた。

或は云うかも知れぬ。それは法式であり、儀禮なのだからそれでいいのだ、と。だが、ただ何となく、空念佛を唱えていたのでは、未開野蠻人が敵を呪い殺すに呪文を唱えるのにも劣つてしまう。

佛教が現在の人の心に甦る道は、偈文の主が第一人稱「我」であることを徹底的に自覺し、私が懺悔し、私が誓願する以外にない。いやそれよりも先に私自身の心に佛教を甦らさねばならないのだ。(竹中信常)

目次

念佛する時の心……………松濤誠廉(14)

孫悟空と平和主義……………成田有恒(17)

はづべし、かなしむべし……………藤井實應(10)

一碗の茶……………吉田絃二郎(1)

永遠の微笑……………佐山學順(5)

象の死……………森正義(19)

今日に生きる道……………伊藤辰造(7)

詩……………鳥井良禪(15)

日常勤行講讀(六)……………竹中信常(21)

芝園だより



一碗の茶

吉田 絃二郎

數ならぬ身とな思ひそ玉まつり

これは元祿七年の夏芭蕉翁が旅先で、江戸の壽貞尼の計に接してうたつた句である。

壽貞尼は江戸深川の芭蕉庵の留守をあづかつてゐた女で、二人の娘もあつた。それが芭蕉が伊賀から奈良あたりを旅してゐる間に死んだのであり、芭蕉はそれを聽いてふびんに思ひ、かの女を弔うてこの句を手向けたわけである。

壽貞尼といふ女は芭蕉とどんな關係にあつた人であるか、これにはいろいろな説が傳へられてゐるが、或る人は芭蕉の妾であつたともいひ、或る人は芭蕉の幼いころの乳母であつたともいつてゐる。はつきりしたことはわからない。そのいづれにしても、かの女は世の人には數ならぬ身と思はれ、自分自身でも數ならぬ身と考へてゐたにちがひない。

しかしかの女は芭蕉の眼には數ある人の一人とも見えただのである。

孟蘭盆が近づいて來るごとに思ひ出さるゝ句である。

數ならぬ身の壽貞尼に寄せた芭蕉の思ひやりの深い、切々たる心情がゆかしく人のこゝろを動かす。

數ならぬ身の平凡な一人の人間が生まれる、生きて行く、やがて死んで行く。それは考へやうによつては一枚の木が芽生え、かゞやき、やがて散つて行くのに比べて何のけぢめもないかも知れない。

しかし考へ方によつてはそれは偉大な事實であり、莊嚴な人生の出來事である。

芭蕉は枯枝にとまる一羽の鳥をも自然界の莊嚴事として認めることができた。ましてや一凡壽貞尼の平々凡々たる人間生活の裡に莊嚴なるものを感じないではゐられなかつた。

一葉一花悉く莊嚴なものを内に含んでゐる。ましてや人間の裡に秘められた莊嚴さを疑ふことはできない。

わたくしの書齋に法隆寺寶藏の聖觀音と興福寺の阿修羅王の寫眞が懸けてある。わたくしはその何れの寫眞にも魅力を感じる。聖觀音のやゝ寂しいが端然たる御姿に惹きつけられることは無論であるが阿修羅王の炎のやうな憤怒、懊惱、憎惡、の姿にも惹きつけられる。

これはすぐれた古代の佛師たちの藝術的な、或ひは宗教的なあこがれといふヴェールをへだてゝ見るゆるゑであらう。この不可思議な紗うすきぬをへだてゝ見る時、阿修羅王の憤りも呪ひも實に莊嚴無比なる美となつてわたくしの心に訴へて来る。

凡夫は佛の慈眼を持つことはできないであらうか。

古代の佛師たちが阿修羅王を刻んだ刹那の心、その宗教的なあこがれ、藝術的な感激を持つて人間を見るならば凡夫凡婦の生活の相すがたの裡に莊嚴なもの、悠久なものを見出すことができるであらう。醜いと思つてゐる人間生活の裡に美しいものを見出すであらう。

田舎から出て來た女に庭を掃かせたところ、莖も、蒲公英も、のしめ蘭も、みづひきも、おけらも、岩かゝみも引つこ抜いて捨てられてしまつた。わづかに松の根方

に一株の春蘭が取り残されてゐたので、わざわざ春蘭を指さして注意をして聞かせたが、それから四五日経つて庭に下りて見たら春蘭もいつの間にか抜き棄てられてあつた。

こまやかな心づかひで人生を觀ることを知らない人は田舎から出て來たばかりの女のやうに、人生のまことの美しさ、ありがたさを感じないまゝに、捨てゝしまふ。

犬と遊べば終日遊んでも飽きない。犬には人をして飽かさせない美しいもの、深いものがある。犬の眼をじつと眺めてゐると寂しさがあり、幽玄さがあり、宿命をさゝやくものがある。

十二單じふにひもとくだの、おけらだのといふ雜草は靴先に踏みつけられて顧みる人もない路傍の花である。しかし萬葉の歌人たちはよくおけらをうたつてゐる。

十二單じふにひもとくにしても路傍に佇んで、じつとながめる。と、その複雑な線の構成、その強烈でしかも澁い打ち沈んだ色彩の美に胸を打たれる。

近松門左衛門が取り扱つた人間は時代物は別として、世話物は市井の凡夫凡婦であつた。その中からまことの美しいもの、寂然たるもの幽玄なるものゝ姿を見出したかれは雜草の中から、しみじみとした美しい花を見出し

た。

文樂座の人形つかひの名人文五郎の舞臺姿を見てゐると、お園をかゝえてゐる眼、お俊をかゝえてゐる眼、玉手御前をかゝえてゐる眼のやさしさに氣付く。文五郎はお園とともに泣き、お俊とともに同じ宿命に泣きながら舞臺の上に立つてゐる。可憐なるお園、お俊をいたはりつゝ、そつとかの女たちの横顔を覗き込んで見る。その折のかれの眼は佛の慈悲の眼を偲ばせるものがある。

今朝もわたくしは人にいたゞいた宇治の茶を點てゝもらうて喫んだ。

毎朝靜かに一碗の茶を喫する時だけはつくづくと生きてゐる身のありがたさを想ふ。

京都を出て奈良に行く道すがら立ち寄つて覗いて見た晩春の宇治の茶畑が浮かんで来る。鳳凰堂にお詣りして堂の前から河原に降りて、十三塔の下から舟に乗つて宇治川をさかのぼつた秋の夕暮れが映つて来る。兩岸の紅葉はくれなゐに燃え、八日ころの淡月が山の端に懸つてゐた。いつの年であつたか、法隆寺に詣でて、夢殿のあたりに白い罌粟の花の咲いてゐたのを眺めて宇治に下りたのは日の暮れかゝつたところであつた。平等院の方が

ら宇治の橋を渡つて行くと、橋の袂に近づくにつれて夕暮れのしづもる空氣に溶けて、茶の香ひがあたり一面に漂うてゐるのに驚かされたことがあつた。

朝の一碗の茶はさまざまのなつかしい聯想を呼びさます。

或る年の夏わたくしは石山へ詣でたかへりに、畑の傍の小ひさな藥師堂の前から芭蕉の幻佳庵の趾を訪ひ、ふたゝび石山の下から坂本行きの汽船を待つた。その時腰を卸した茶店の婆さんが「このころは石山の螢も少うなつたので、宇治の方から捕まへて來て放します」と語つてゐたことを懷ひ出す。

また朝の一碗の茶は叡山の麓の坂本に泊つた夜のことを思ひ出させる。日が暮れて間もなくわたくしは、あてもなく坂本の町を歩いてゐた。すると、そここゝの石垣の間にかまへられた龕に御燈をかゝげ、ひさまづいて合掌してゐる女たちを見た。

あたりには夜霧がこめてゐた。あちこちに御燈をさゝげ行く人々の姿が月の下に繪のやうに浮かんでゐるのを尊くもながめたことであつた。

朝の一碗の茶はまた或る秋の奈良の旅をおもひ出させる。時雨のところであつた。淺茅ヶ原にも三笠山にも人影

稀で、時々、思ひ出したやうに東大寺の鐘の音が山にこだましてひびいてゐた。折から、さつと時雨が降つて來た。わたくしは二月堂の下に雨を避けた。するとあたりで遊んでゐた鹿の子が急いで堂の下に駆け込んで來た。時雨の霽るゝまでわたしたちは鹿といつしよに二月堂の下に雨の脚を眺めてゐた。

朝の一碗の茶は、また或る年の木津の町を思ひ出させる。わたしたちは東大寺の門を出て、あてもなしに歩いてゐる間に、なかば崩れた築土の塀に取りかまれた古い屋敷のつゞいた郊外の町に出た。そしていつの間にか木津の町にたどり着いた。木津の町はどんな町であつたのか、今では記憶にも残つてゐないが、たゞ一本の桐の花が咲いてゐたことゝ、桐の花の下に一人の女が立つてゐたことだけを夢のやうに思ひ出す。

生きてゐることはありがたい。たゞ一碗の茶を喫するばかりにも。

六月のこよみ (みなづき、田草月)

田植えもすんで、日本特有の梅雨(十一日)に入る。音もなく煙る雨に、なよなよと田面にゆらく青苗が、今年もまた豊作を約束している。はつ

らつの夏の季節に入る前の、しばしの自然の休閑期である私達も雨安居して、内に魂の叫びにちつと耳を傾けよう。

四日、傳教忌(六月會)天台宗開祖傳教大師忌。弘仁六年に示寂。

七日 品川天王祭

十日 時の記念日、日本で時計の作られたのは天智天皇の時といわれ、これを陽暦で六月十日をその記念日とした同日、源信忌、本宗にとつて因縁淺からぬ天台宗の源信(恵心僧都)の忌日。往生要集の著者として、淨土思想の鼓吹者として、忘れることの出来ぬ人である。

寛仁元年(一〇一七)寂。

十七日、相國寺儀法、京都五山の一相國寺は夢窓國師を開山とし、毎月十七日觀音懺法とて、年中行業の罪過を懺悔し、佛の利益護持を得るの式を行つた。今は年一回本月に行う。

二十日、鞍馬の竹切り。延喜年間峰延和尚修法中、これを吞まんとせる雄の大蛇を呪文を以つて寸斷せるも、雌の大蛇は助け放つて、水に乏しき鞍馬山中に清水を出さしむ。この故事に因み、鞍馬寺に於いて、本日、二本の竹を大蛇とみたて、一本を寸斷し他を根こそぎとする式を行うその様勇壯にして、古來より近隣にその名高し。

二十四日 愛宕祭

三十日 天王寺愛染明王祭

法話 永遠の微笑

佐山學順

私は一ケ年有半、戦犯教誨師として英國關係方面に其任を帯びホ
ンコン、シンガポール、マレイ各地に散在せる戦犯人七ヶ處の刑務
所に收容されたる人々、主に軍人であるが執政官、理事官、警察刑
務官、軍屬、在留同胞の方々、其方面の死刑者貳百四十人、現在收
容中の同胞約五百人位に接した。

敗戦の悩みは國民等しく味ひつゝあるが、これ等戦犯人には、一
層痛切に體驗する所である。悩める所に解決の志望がある。一般人
の悩みとしては先づ經濟的解決を豫定するが經濟的に解決し得ざる
悩みは何によつて解決するか。單に運命觀の上に消極的に「仕方が
ない」で解決する人もあるが、もつと宗教的に積極的に、換言すれ
ば、悩みを轉じて喜びに、苦を樂に、そして生を喜び死を欣ぶ所の
信仰に生きる事が重要な事である。

(5)
死に追ひつめられたる人々、自由と動作とを束縛されたる方々の
悩みは深刻であるが、其中に満足と法悦の中に總てを解決し得られ
たる人は幸福である、特に永遠の微笑の中に人生の一大事死生を解

決せられたる戦犯死刑者の最後を見送りて其崇高なる場面を此の目
で見、そして此の耳に金言玉章を聞いて信仰の力の偉大なる事に
感銘した事である。

もう一周忌になるが巢鴨に於ける戦犯死刑者東條等七人の最後の
様子が花山信勝師を通じて新聞雜誌に發表せられたる事柄を見た人
々は等しく、人將に死なんとする時「心顛倒せず、心錯亂せず、心
失念せず、身心に諸の苦痛なく身心快樂にして禪定に入るが如く」
とある發願文の言葉の如くと感を深くされたる事と思ふ。

ある將軍が死刑を前にして私に述懐さるゝ様に、「人間の多くは特
に死なんとする時最後の一秒に至る迄、死にたくない」と煩悶し、生
きたいと懊惱しつゝ結局死んでいくであらうが、生死を諦めて永遠
の生命に生かさるゝ喜びを感じて、何等の苦痛煩悶もなく此世に御
暇を告ぐる事を得たる私は身の光榮と幸福を感じる事を難有く存じ
ます」と。事實大方の死刑者は「立派な最後を遂げよう」との民族
的信仰と、小生涯を終れば大生命の中に生きる信仰とを以て絞首臺

に上られた、其心境を表明されたるものに

故信澤中尉は

大空の青の深さを誰知らむ白雲去りて一物もなし

矢島大尉

今更に何をかいはんひたすらに祖國再建新らん我は

大塚少將

幕末の志士を囚屋に偲びつゝ行くを待つなり祖國の爲に

清水少尉

生き甲斐の無き身は此處に果てるとも國の鎮となるそ嬉しき

小久保中尉

今更に何とて嘆かん武夫の御國の爲に逝くと思へば

前田中尉

外國の裁の庭に立つ我は大和男子の誠知らさん

日高少將

つばくろめ北に歸りて傳へかし大和男子は雄々しくゆくと

裁かるゝ堅き心の我は今瀬を行く水の白玉と散る

岩松大尉

かへりなば語り聞かせよ國の爲め笑つて逝つた友の事ども

憂き風の娑婆をば捨てゝ往きゆかん垣河沙越えて不二の法門

本間曹長は

今日こそは晴の旅路そ氣はすみて朝日かゝやく南國の空

原田中將

君か爲花も散れりと世に宣べよ海をわたりてかへるみつばめ

君かため國の御爲盡したる靖國人のみあと續かば

佐々少將

ありし時惠あふれしたらちねの御膝にかへる今日ぞうれしき

正木大佐は

このわれは南海の露と消えぬとも心は淨土にまたは祖國に

山下大將

満つとかけ晴と曇と變れども永久にさえずむ大空の月

ましてしばしいさを残してちりし友あとなしたひて我もゆきなむ

これ等は民族的信念と宗教的安心のもとに、悠々として死に就いた人達である、勿論これ等死刑の運命の人には尋常人と全く違つた考がある、吾々は結局死の宣告があるとは知つて居ても感じが深刻でない。「人は皆百迄生きるつもりにて死ぬるなどゝは思はざりしに」という様に重病人でも生きらるゝ望を思ふ、ある人の歌に「けさ迄も今五七年と思ひしに今に死ぬとはあきれはてたり」とある。然し戦犯死刑者は其生命には限界が豫告せられて居る、無常なるものゝ實感がある、かといふて何等の詮方もない、地上の何物も頼りにならない、何物も此の人の生命を救ふ事が出来ない、いかなる現實も力も、國の力、親の情、況んや金銀財寶も此の人の望を叶ふ力ではない。絶對絶命に追ひつめられた人である。たゞ此のどん底の人に宗教の法悦のみ絶對である。私は特にいふ、宗教的歡喜の中に永世に生きられし人は幸福な最後である、即ち無限なるものに一致して無量壽無量光の佛に生きられたからである。

道に生きる今日

隨想

伊藤辰造

五月も半を過ぎると春も古い、關東以西では山地を除いて今は青葉も逞しい颯爽たる偉丈夫の装いと變つて男性的な風致を誇つてゐる。初夏の風を切つて驚進する列車から眺めた武藏野の姿、これは又先頃と打つて變つた美しさ潑刺さを車窓に去來して甚だ旅情を慰めて呉れる。

ほゞ、穗も出揃つてピンと青空を刺すかの様に、不動の姿勢で立ち並ぶ大麥の列々々、これにまぢつて緑濃い葉を慎ましく垂れて寄り添う小麥の群。遙かの山々を背に、一連二連の雜木林を控えて丘坦を被う緑の波濤を彩つて、浮彫の様にクツキリと盛り上がる黄一色の菜畑と、可憐な帶紫色に楚々として一毛田に咲競う蓮華草の其處此處。揚雲雀の單調な囀りを背に聞きながら、娘達であろうか一様に冠つた眞白な手拭の日盛りに照り映え、清楚な野面に點々ときらめく様は、花々に飛び交う胡蝶にも似て誠に私達の目を樂しませる。何んと長閑な、そして何時に變らぬ春の田園情景ではあるまいか。

この様な自然の姿に接するとき滲々と思はせられることは、私共人間社會の淺間しさ慘らしさである。同じ自然界で同じ天地の恵を受けながら、人間丈が様々な醜態を見せるの

は何故であらうか。

難多な例は限りも無いのであるが社會の師表たるべき指導層にあつてすらも、教育家が單なる月給取りとなり果て、學園には赤旗が翻る、宗教團體が矢鱈に裁判所邊りと懇意になり、坊ン様の七ツ道具に算盤が一丁増えて中々達者に立廻るのが出て来る。醫者殿は仁術から忍術にでも化け損ねてか、轉げ落ちて毛脛を表はし、政治家や公務員は盛んに活躍？して三面記事の立役者の様な觀を呈する。凡そ反對なのに、消防吏員が火付けをして、警察官が強盜と鮮かに早替りを演ずる。此處まで來ると書く方もせつないし讀まれる方も不愉快でありましょう。

このようなことの起るのは、物質文化が急速に進歩するに對して精神文化が停滯して、實質的には甚しい退歩をしているからである。

吾々人間の祖先が果して「禁斷の木實」を食したかどうかは保證の限りでないが、兎に角吾々が「智慧」を持ち合はせてゐる爲に、反つて他生物には恐らく無いであろう「苦の娑婆」に咆哮しなければならぬと云ふことは、要するに「智慧」の善用を誤る所から來るのであつて、造化の神としてこれを其の様に

用いよと與えた譯でも無からうし、釋尊、キリスト、孔子その他の列聖も元より左様には論じて居られない筈である。この「智慧」が一層無ければ無いで至極簡単な話で、犬猿か狐狸の様な生活をすればそれで良ろしいことになるのであるが、吾々は物と共に心の生活を持つてゐる以上、精神文化の向上に對する關心は、今日の世相にあつては萬人が萬人持たねばならぬ重要な問題であつて、これを私共が日常生活の上にありのまゝに現はしてゆけば、正しい社會文化の發達を見ることが出来るのでありましよう。

そこで「心」と心の生活に就いて難かしい問題は専門家にお任せする事として、私は私共として少しく考えて見たいと思うのであります。

吾々が誰しも持つて居る所の信仰心と思考力とは、自然から與えられた最大の恩恵であると同時に、人それぞれの機に應じて常に之れが正行に勉めることが人たる私共の特權でもあるあり、且つ最高の義務であると信ぜられる。

この天與の特能が豊かに正行されることによつて、宗教・教育・政治・經濟・技術・保健など複雑極まり無い私共の社會生活と云う

共同體、例えば一隻の巨大な客船が、萬人を乗せて漕ぎ進む人生の海洋を眞理の一點に向つて運航され、應て老若男女、貧富貴賤の別なく、それぞれに大安心の彼岸に到達する歡びを分かち合うことが出来るのであつて、また斯くあつてこそ限りある私共の生命も、丁度點の連續が線を現はす様に、人類のあらん限り無限に連續し、一人一人のささやかな業績も、時と共に積み重なり押し廣げられて凡ゆる文化の向上進歩が限り無く約束せられてるのであり、又これを心の面からは、僅か百年にも足らずではあるが吾々自身は相當に永いと思はれ、然も大自然の營みよりすれば實に瞬間的な人間の壽命も、即ち正しい信仰によつて久遠の生命の一還として悠久に生き、且つ活きることが出来るのであります。

私共は、この眞に儚ない壽命を無限の生命として、現實社會と心の世界の上に一瞬の弛みなく、躍動し、傳承し、成長することの素晴らしさに胸躍らせると共に、人間として生れた責任の如何に重大であるかを自覺しなければならぬのであります。

實際問題としても吾々が此の世の中に人間として生み出された、其の時、其の事自體が大にしては宇宙、小にしては一生物が生成發

展しつゝある事の示現であり、其の基礎的活動の現實であり、且又、社會人類進化の貴重な資源の實現であつて、この貴重な資源に於てからが自然に委せて徒らに放置されたならば何等社會に役立つものでも無く、或る意味からは一般動物の類と大差なくなるのであります。それ故この資源的人間、即ち生れたばかりの純正無垢なる人の子等と、人々が協力して正しく立派に育てると云うことが如何ばかりか尊い事であり、そして又この聖業の直接責任者である親たる人々にあつては、大いなる誇りと確たる心構えとを以て此の人生最大の事業であり最高の藝術である育児のために、全身全靈を傾けねばならない。

この育児と云うことが、實は最も簡明に且つ實際的に、心の生活の如何なるかを説明し教え盡して呉れてゐるのであるけれ共、現實生活の中でこれを全うすることは誠にむづかしいのであります。

何時の時代も同じ世知辛い世の中、増してや今日の様な混亂した社會生活の中に、凡ゆる艱難と闘ひ、時には抑え難い感情をも抑えつけて、我が子が其の天分に基いて、渾一本丸裸にしても値打の變らない立派な人物となる様にと、眞實を盡して日夜骨身を削り續け

るばかりの親心。それは丁度、鑽石を鑑別し
熱火の爐によつて熔流冷却、純良な鐵材を得
ると同じである。此のホンの三、五年間の揮
身の努力其のものが、實に、我が子の生涯を
左右する所の基盤を成す根底であると斷じて
決して過言で無いでありますよう。

誠にこの親心こそは、久遠の生命に生きる
永遠の父、永遠の母の姿であり、正しく神そ
のものゝ業、佛そのものゝ姿で無くて何んで
ありましょうか。

私共は、人の親たると否とを問はず人とし
て今日在る以上、出来る出来ない、成る成ら
ぬは次の問題として、我が力の限りを此の事
に傾倒し、人生の一切が此の事に盡きると云
う自覺と信念を堅持しなければならぬ。圓
満な家庭生活も、平和國家の建設も、理想社
會の實現も、想像を絶した科學の發達も、總
てが此處から生み出されるのでありますよう
今日吾々社會人が、目光の取るに足らぬ事
柄にも喧々囂々、互ひに他人の齟の穴を穿り
合う。譲り合えば何んでも無いことでも我れ
勝ちに先を争うから手間も取れゝば目も三角
になる、怪我もすればつまらぬ所で壽命も縮
める。その他、誰しもが不快に感じるであろ
う日々の利己的排他的出來事が、吾々生命の

延長であるべき一般子弟達將來の幸福のため
に、如何に惡影響を與えてゐるか、誠に寒心
に堪えないものがあります。

この様に善玉惡玉亂れ飛ぶ現實社會にあつ
て、吾々が眞に世の幸福を考えるならば、第
一に、無窮の世界と久遠の生命を生地で具有
し「未來」を代表する幼少年の幸福を希はね
ばならない、そして彼等の幸福のためには先
ず吾々青壯年層が成し得る限りの犠牲を拂う
ことである。犠牲と云う言葉が耳障りならば
奉仕でよろしい。犠牲奉仕は他から強要され
るから妙になるのであつて、他の爲に自主的
に進んで行ふ事は立派な行爲であり、意義あ
る社會的生産でもあります。

世上百般の事で犠牲奉仕の伴はないものは
恐らく無い、吾々身近な日常の事柄にさへ幾
等も其の例を見るのであるが、子供の事につ
いては、其の心盡しの反應が手ツ取り早く現
れないためにピンと來ない、子供の事は……
と解つて居ながら遂、忙がしさにかまけて心
の單簡の隅に仕舞ひ込まれ勝ちになる。種々
と難關のある事ではありますが、我が子に關
する限りこの犠牲奉仕は是が非でもせねばな
りますまい。人生の苗木である子供等の將來
に苦難となるべき雜草や害虫は悉く採取驅除

することに努め、又自身が當座の悅樂や現在
の單なる利得を追ふなどの考えはドシム刈
り取つて堆肥(ツミゴエ)とし、腐熟殺菌の
後これを肥料に施して子供等が他日成木とな
つて佳き實を熟らす秋の喜悅に置き替えてや
らなければなりません。

斯くして佳き實は良い種子を遺し、その種
子の中に久遠の生命として我が意志なり理想
念願が甦り、その實現としてこれが又立派な
苗木となる。この様にして子から孫・曾孫と
繰り返えされる毎に理想念願も社會の進展と
相俟つて益々成長し純化され、そして此の限
り無い轉回が宇宙と共に續けられることによ
つて私共の朗々たる久遠の生命は、直なる眞
理の一線上を悠久に清明の闊歩を續けるので
あります。

永遠の父、永遠の母、
誠にこの父、この母たり得る唯一の道こそは
まさに正しい信仰心と思考力の内に在るので
はありますまいか。

私共の心の定まりますとき

無上の天國は

極樂淨土は

その時と所を撰ぶことなく直ちに私共の、こ
の五尺の軀間に極みなく具現される事であり
ますよう。

終りに拙作ではありますが終戰翌春の狂歌
めいた一首を添えまして此の稿を終ります。

仕合せは かいて詮なき慾ならで

まこと心の 鏡にぞ見る

愧づべし、悲しむべし

法然上人
法語私釋 (五)

——われはなにによりて生死にとゞまれることぞ——

藤 井 實 應

そもそもわれら曠劫よりこのかた佛の出世にもあひけん、菩薩の化導にもあひけん、過去の諸佛も現在の如來も、みなこれ宿世の父母なり、多生の朋友なり。しかるにかれはすでに菩薩を證し給へるに、われはなにによりて生死にはとゞまれるぞと、はづべしはづべし、かなしむべし、かつしむべし。

(法然上人、三部經釋)

われわれは、はかりなき昔から今日に至るまでに、み佛の世に出でたまうた時に遇ふたこともあつたであらう。菩薩(自ら菩提を求め、同時に他を教化する聖者)のお導きをいたゞいたこともあつたであらう。過去のもろもろのみ佛も、現在の如來も、みなこれ前々から生れかわり、死に

かわりてうけた過去の世の父母であり、朋友である。しかるにかれは、すでに道を證りたまうたのに、われは如何なるわけで今日まで生死(まよひ)の世界にとゞまつてゐるのであるかと、省みてはづべきであり、悲しむべきである、との意である。

ひるがへつてわれわれは何を恥ぢ何を悲しんでゐるであらうか、金無きを恥づるか、名なきを悲しむか、成功せぬを恥づるか、失敗したことを悲しむか、成功した、失敗した、損した、得した、譽められた、そしられたなどの滅びゆくはかなき事にのみ、あくせくしてくらしてゐる中の、恥も、悲しみも夢のまた夢であらうか、これではならぬと眞實なるものを求め、滅びざる道を求むるところに信仰心は芽ばえるのである。「菩提(道)をさとること」即ち眞實に生きること、眞の生命をうること、これが信仰の中心で

なければならぬ、むなしきこと、滅びゆくものを求めて何するものぞ、滅びざる眞實のものをこそ求めなければならぬ。この常住にして眞實なるものを獲ることが「生死を出づること」であり「菩提を證る」ことである、これを得ざるこそ最も悲しむべく、恥すべきではないか、悲しむならばこの菩提を得ざることを悲しむべく、恥するならばこの「生死にとゞまること」を恥じなければならぬとのみおしへである。

佛陀釋尊のお弟子の中で智慧第一といわれたのは舍利弗であつた。彼が出家の動機及佛陀の弟子となつたその因縁を思うと、二千四百年前のことではなく、現在のわれわれにひしひしと迫り来るものがある。實に信仰は古今を問はず東西を貫いて流れるものであることが分る。

「王舍城の東北を去ること遠からぬナーランダ村の豪家にウパチツサ（舍利弗）」と呼ぶ若者がいた。隣村のコーリタ（目連）と親しく交はり、互いの志を語り合ふ仲となつてゐた。或日兩人は附近の山祭に浮かれ廻る人々の有様を見ていとわしい心を起し、寂かな所に去つて麓の王舍城を望み冥想に耽つていた。「あのさわぎ、あの群衆、暫しの夢を貪つて歡樂に餘念のないあの群衆も百年経つたら誰か生き残らう。神の樂師ケンダツパが奏する音樂に心を蕩かしてをる間も、人間の悲しみは遠慮なく見舞うてくる。あの遙

かに見ゆる大都會も何時かは滅びる時がくる、滅びるものが、滅びるものを求めて何とするのであらうか」兩人は遂に携えて出家し、王舍城に入つて、當時有名な修行者の一人であつたサンジヤヤの弟子となつた。（新譯佛教聖典）

かつてこの一節を讀んだ時私の十七歳の頃を思ひ出さずには居られなかつた、大正三年秋、大正天皇の御即位式が京都で行はれた時、私は京都にゐた、京都はお祭りさわぎで大變なにぎわいであつた。私は何かの用事で外出し、そのお祭さわぎを見、烏丸三條あたりの電車で、若い男女が數人酔つぱらつて一おどらんか、おどらんか、踊らな損じやぞ一と、その頃の流行歌を歌いさわいでいた姿、殊にその中の一人の女のよつぱらつた姿を見たとき、急にさびしさを覺えて、家に歸り、一人生あれでよいのか」とふさぎこみ、考へこんでしまつたことを覺えてゐる。そして出家して専心佛道に進みたいとの念願がはつきりしだしたのもそれからであつた。舍利弗出家の動機の文を讀んでみると、まるでその當時のわが心もちそのまゝが記されてあるように感ぜられた。

舍利弗の如き大智慧者も、私如き愚かものも出家の動機に至つては餘りにもよく似てゐることゝて自らのことを省みざるを得なかつたのである。有限相對のはかない人生の

すがたに氣づき、永遠に滅びない眞實を求むることが入信の根本ではなからうか。それはお祭りを見たことが動機になることもあらうし、病氣や、逆境や、近親の人に突然死別することなど、人生の非常時、不如意の時に、それを動機として眞剣に道を求むることが多いであらう、しかし人生の非常時とか不如意の時のみに限らず、要するに自らの生活が自らの問題となつて、これではならぬと氣づいて、「眞實に生きん」と、其解決を求めること、即ち人生生命の本質的な願を明かにせんとすることが入信の中心となるものであらう。

舍利弗はかような動機によつて出家し、サンジヤヤの弟子となつたが、更に彼が佛陀の弟子となつた因縁についても教へられることが多い。

「ある朝、阿説示といふ佛陀の弟子が王舍城に托鉢をした。その威儀の正しいことは、偶々行きかわしたウパチツサ(舍利弗)の心を捕へた。『あゝ何という氣高い姿であらう、世にもし覺りをえた人があるならば、この出家は確かにその一人である』ウパチツサは阿説示に近づいて道を問おうとしたが『今その時ではない、托鉢のすむまで待たねばならぬ』と思ひ、阿説示の後に隨うた。阿説示が托鉢をおわつて町を離れるとウパチツサは進んで尋ねた『友よあなたの御身體は誠に静けさに満ち、清らかに澄み切つて

ゐる。あなたは誰を師としておられますか』『友よ、今、釋迦の一族から出家した偉大な出家があります。私はその世尊の教を奉じておるものであります』『あなたの師はどういうことを説いておられますか』『私はこの教に新しく入つたものであるから、それを詳しく説くことは出来ぬが略していえば一法は縁によつて生れ、縁によつて滅びる』ということであります』ウパチツサはこの簡単な教を聞いて一生れるものは必ず滅びる』という道理をさと、かねて約束してあるコーリタ(目連)にその事を語り、また二百五十人の友にもこの事を告げた。こゝに彼等も兩人に従つて世尊の許に道を修めたいと申し入れた。兩人はサンジヤヤにこのことを語り師のとゞめるのを聞かず、二百五十人を率いて世尊の在す竹林園に赴いた。』(新譯佛教聖典)

この物語りの一節はオルデンベルヒの『佛教』の中には次のように述べてある。

「そのときアツサジ(阿説示)は舍利弗にこの法語を語り、諸法は因縁より生ずるもの、その因縁を如來は説き、且つその終局を説き給ふ。これ即ち大沙門の教へなり。この法語を聞きし時、舍利弗の心中に純情無垢の心眼忽ち開けて、彼は常に生に服するもの悉く滅に従うを悟りぬ……」

この物語りの中にわれわれはそれぞれに教へられること

が多い。舍利弗は阿説示の威儀の正しいところに眼をつけた。そして法をたづねたのである。阿説示を見た人は何人あるか分らないのであるが、その時舍利弗一人が彼の中に尊いものあるを見出したのである。それは何と尊いことであらうか、よいものをよいとながめ、尊いものを尊いとする眼を開いてゐたということが有難いことでなければならぬ。そして阿説示の威儀の中には善き師（佛陀釋尊）の感化をしらすしらすの間にうけて、よろこびの光がみちてゐたのではなからうか、善き師にあひ、善きみ法をうけたよろこびは、おのずから身相にあらはれるものである。それを見ぬいた舍利弗はまた尊いといはねばならぬ。更に謙虚に道をたづねる態度もその間にうかゞはれるし、またその頃舍利弗自身が問題を持ち、それに悩んでゐたことも察せられる。熱烈なその求道の心を以て法を問うたのである。それを機縁として心中に「純情無垢の心眼忽ちに開けて」「生れるものは滅びるといふ道理をさとる」得たのである。信を求むる者はこの眞摯な求道の心、求道の態度がなくてはならぬ。この求道心が信の眼を開かしめるのである。

舍利弗が目連らと共に阿説示の紹介により釋尊の弟子となり、その後千二百五十人からある多くの弟子中、舍利弗は智慧第一、目連は神通第一と呼ばれることゝなつた。舍利弗は教團に於て先づ第一に佛陀釋尊に禮拜し、次には阿

説示に禮拜挨拶をした、これは終生かわることがなかつたという。佛陀によりて教へられ悟りを得た悦びを思うにつけても、佛陀のみ許に導きくれた阿説示に感謝せざるを得なかつたであらう。終生釋尊に次で阿説示を禮拜挨拶したという舍利弗は、また實にわれら道を求むるものゝお手本ではなからうか。

「菩薩を證る」「生死を出づる」こと、即ち不滅の眞實生命を獲得することが佛陀の教である。そしてそれは誰でも——賢き者も愚か者も、學問の有るものも無きものも、富める者も貧しき者も、善人も惡人も、男女、老幼誰でも——その道に入ることのできる所謂萬機普益の法門を開顯せられたのがわが法然上人であつて、選擇本願の念佛が即ちそれである。

筆者紹介

佐山學順氏 三河大樹寺貫主、マスター・オブ・アーツ

伊藤辰造氏 農村青年同盟參與、熊谷市公民館運営委員兼教務部長

成田有恒氏 本宗所屬の新進作家、淨土宗新聞編集員

森 正義氏 大阪府下白木村こどものてら、佛教童話作家

念佛する時の心

松 濤 誠 廉

至誠の心と深心と回向發願心との、この三心が具足した念佛が淨土宗の念佛であるが、この三つの心の中には念佛行者の態度、人生觀がこもつてゐる、廣く云へば一代佛教の結論であつて決して單純なものではない。念佛行者はこれを心の中に確保して念佛せねばならぬのであるが、念佛する時に必ずしもこの内容の總てが意識に現れてゐるのでは無い。

本宗の念佛というのは、たゞ口に稱える念佛の意味であるが、その時の意識にあるもの如何によつて種々な形の念佛ができる。また本宗で散心の念佛というのは、往生の因としての念佛は散心の念佛でよいと云ふ意味で、本宗人の修する念佛が總て散心であると云ふことを主張するものではない。修の形式から云へば、佛前に坐しての念佛と生活の中での念佛とに分けることが最も當を得ており、そして前者は定的であり、後者は表面は散である。

今初めに佛前に吾々が朝夕となへる念佛、或は別時の念佛を考へて見やう。この時人により場合によつて種々な意圖のもとに、例へば、順次往生せしめ給へ、吾を擁護したまへ、見佛せしめたまへといった願求心のもとに、或はまた自然と浮んでくる幻想的諸觀念と列んでも念佛することができるが、宗祖のこの種の念佛の型やこれ

等によつて定められたと考へられる一般の勤行形式を尊重するならば、光明遍照の想ひのもとに念佛するのが正しい念佛となる。即ち「吾れ今口稱するが故に彌陀の光明に攝せられ居るなり」の念想の中の念佛である。たとへ「救け給へ阿彌陀佛」から入つても、この口稱中にはこの願求が反省されないが故に、これは消えて定的寂靜の喜は光明攝取の思ひに移向していく。この喜びは自己の意識の分裂によつて感知されるのであるから、更に純に念佛を續けるならば、彌陀の光明の中に攝せられてゐるのみとなる。或は「唯念佛の聲のみして」の意識は念佛三昧の一境地とされているが、これには聲の反省がある故に完全な三昧であるとは云ひ得ないのでは無からうか。

かくて「光明遍照」の想ひから入つた念佛の行者は彌陀の光明攝取の一本立の念佛三昧に入る、云はゞ光明三昧に導入するのである。これこそ本宗の教義彌陀存在の依つて生ずる最も確實なる論據であらねばならぬ、この光明三昧中に僅かに自己を分離して反省する時に、行者は自己も自己の意識にふれる山川草木皆彌陀の光の一世に攝せらるゝを知るであらう、これが「いたらぬ里なき」月影を眺めたのである。このまゝの自己、このまゝの世界が彌陀の光明に

隔せられているのである。この境地は、禪宗の光明藏の世界、天台の一念三千、華嚴の十重無盡の世界、眞言の曼陀羅世界と實質に於てどれだけの相異があらうか。差は教理の型或は傳統的解釋により

かしたところに、その先師と異なる新生命があり、大乘の妙有の理と實際もこの進轉に他ならぬからである。本宗ではこれを生きながらの念佛で完遂するのである。西方をこ

末梢的なもので、實質に於いては同一の世界である。聖道門にして悟りの境地と呼ぶならば、本宗のこの型の念佛三昧も悟りの境地であらねばならぬい。

然し本宗ではこの境地を覺りの世界とも云はず、極樂往生の境地とも云はない。往生を死後に置いて、これによつて覺執を除き、覺者の重要々素なる「覺りの無限の向上」を易にして行ぜしめるものである。嗚乎、本宗の易行極大乘にして奉ずべきではなからうか。

この光明三昧は吾々の煩惱の靈習を清め除き、解脱の潜在意識を豊かならしめて覺的人格の基礎を形成していくのである。

若し本宗がこの型の念佛のみを説きこれを最上としてこれに止つていたとするならば、本宗は聲聞乘に近いものと非難されてもやむを得なかつたであらう。何となれば、これは與へられた現實のすべてを捨て、の念佛で、云はゞ止と捨の行であるからであるからである。釋尊の覺りは現實の力のすべてを覺の中に動

梅 雨

いち日

雨は廻廊の錆びた風鐸の色を洗つた

書院は森閑と暗く

薇の匂がした

疊の上をかすかに蟹が走つたが
その音もやがて消えてしまつた

夏 至

雲と雲のあいだに

山岳はすでに突兀と輝いていた

宮殿諸樓閣

觀十方無礙

山門の破風をこえて

雲雀が鳴いた

鳥居 良禪

實在する西方淨土と口稱による死後の往生を信することゝ不斷の念佛によつて、易々と歩かしめられるのである。即ち具象的な西方淨土の信は同じく具象的な現實の認識を容易に可能ならしめ、

の世界の彼方に置き、往生を死後に定めて、現實をそのまゝに意識し踏んでその上に立つての念佛である。諸行往生の思想に最もよく現れ、行としては念佛しながらの生活に現れてゐる。この念佛しながらの生活には如何なる意識が作用するであらうか。先の光明三昧の直觀は消えて、それによつて作られた覺的潜在意識は全意識層の奥に入つて無意識的に作用するか、必要に應じて念佛によつて呼起されて裏面より表面意識に作用するものとなる。表面にあるものは、淨土の信仰と現實世界への冷厳なる知的觀察、善惡正邪の倫理、哲學、科學的知識、其他自己の有する先天的後天的能力の一切が意識され動くのである。即ち念佛の行者は、信を西方の淨土に置き、口稱念佛しつゝ與へられたる現實の世界を嚴然と歩み行くのである。この歩みは、覺後に苦の世界を見つめつゝ、執せず離せずその化度の任を全うして一生を過された釋尊の歩みである。この大なる歩みを念佛の行者は

聖道大乘の理事の昏同より救ひ、死後の往生はこれを共に怠情を除き、不斷の念佛は所謂覺意識を生活意識にかへ或はこれに作用せしめんとするのである。また信を西方に置くが故に覺者の離脱性を具へ、死後の往生を思ふが故に現實を捨てず、不斷念佛の故に離苦の喜びを知るのである。故にこの念佛しながらの生活は未だ覺らずして既に覺者の道を歩ましむる者であると云ふ事が出来るのである。

この西方の信と死後の往生と不斷念佛の三要素は相離れざるものであるが、理論的根底をなすものは西方の淨土の存在である。これなくしてはこの第二の行は成立しない。この問題は科學的教育を受けたる者への難題であるが、これは宗祖以來本宗に傳はる解脫的倫理の世界觀である。これを變更すれば本宗は大なるものを失ふのである。智的能力の一面に過ぎない科學との矛盾は統合された全人格の至福の前には春雪の如く消えねばならぬし、また逆に精神界の科學的研究能力に卓絶せるものが「より完全なる人格への容易にして正しき歩みの方法」を至方立相の淨土の主張によつて完成したのが淨土信仰であるとも言ひ得る。いづれにしても、部分のみを見て全體を握み得ぬ科學が、複雑なる生命を既に完全に説明し得るが如く思ふところに西方の疑が生ずるのである。西方は科學的存在ではなく、吾々が最も速かに完全人格に近く且つこれに向つて進む生活を營み得る爲めの存在で、それによつて生ずる覺的人格及び其生活の事實によつて其の存在を實證さるべきものであるとも云ひ得る。即ち吾々は佛前の念佛行の果によつて彌陀佛の存在を知り、こゝにまた不斷念佛の覺的人格生活の實證によつて西方淨土の存在を證するのである。

この二つの念佛の行の中、前者にありては彌陀光明攝取以外の念

想は善惡共に拒否される、そして光明想に住するのであるが、これによつて本宗信者としての深さを増すのである。後者の不斷念佛の行にあつては、善惡の念想の必要により、或は自から生ずるもの總て認容されて西方淨土と結合され、裏面には彌陀と結ばれて、往生の爲めの行爲或は彌陀の御心に適ふ行爲の方向に整理され淨化される。これによつて本宗信者としての人格の廣さを作り、行として覺に適はざることのなきものたらしむるのである。故にこの二行は共に本宗信者の修せねばならぬ根本行で、單に自己完成のためのみならず、本宗を現世に盛ならしめる爲めの基本である。本宗を隆盛ならしむる爲めには教理を現代化するにあるとか、或は布教或は宗教的社會事業を謀るにあるとか、吾人はこゝに一理を見ないのでないが、これ等はこゝに述べた念佛の二行に比すれば、支末である。この行の盛なる時、本宗の生命躍如たるを確信するものである。

人間とは

禽獸の心情をもつて享樂をのみ追うものには、かれの生は、或る時間内に愉快な瞬間が多くあつたか、少なくあつたかに従つて、豊かともみえ、乏しいとも見えるものだ、……

生とはたゞ、無情なるものと永遠なるものとが觸れあうところに生れいづる刹那の調和であるにすぎない。しかるに人間とは、この調和を生みいだすところの妙えなる音聲であり、直觀にとつて常住の對象となるところのものである。

……みづからの存在において、なにが自分自身であり、なにが他者であるか、世界において、なにが自分にとつて他者であり、なにが自分自身であるか、を識別しうるもの、かかる人間に對してのみ、自由も存在も無限もまた存在するのである。

(シユライエルマツヘル・モノローグより)

西遊記は周知の如く三藏法師、孫悟空ら同行四人（——正確に云えば一人三匹）の膝栗毛である。天竺へ大乘經典を取りにゆく難路峻行の旅物語である。

作者と伝えられる明朝の吳承恩は、構成メンバーのそれぞれを、きわめて象徴的に描き分けている。

孫悟空は野性的な性格の持主である。妙術や、猿智恵とは凡そかけ離れた逞しい才智を駆使して縦横に暴れ廻る。旅路のゆくてを、さえぎる数々の妖怪變化と勇敢に戦い、文字通り快刀亂麻になぎ倒してゆく。金角銀角との攻防、牛魔王退治の章などは壓巻と云うべきであらう。西遊記が、いわゆる單純なピカレスク風の冒險譚だけであつたとしたならば悟空こそはその立役者であるに違いない。

（17）
猪悟能八戒は猪（豚？）の變化で、一通りの妙術を心得ているとは云うものの、きわめて間抜けな、まるで悟空の強さを引き立たせるためにあるような悲しい存在である。八戒なる名前が皮肉と思われるほどに、五慾具足の凡愚ふりを隨時隨處で發揮する。ひもじいと云つては妖怪のワナである餌に手を伸ばし女人國に至れば舌甜めずりをしながら漁色の構えを見せる始末。化物の風上におけないような道化者だ。だから數限りなく失敗をくり

返し、師僧や友を危地におとし入れ、あわやと云う處で悟空に救い出されるのが落ちである。小心者の癖に、ギラついた慾望を抑制し得ない猪八戒の像に、現實の我々の一面が寫つているとは云えないであらうか。

沙門悟淨は水棲動物の變化であるが、その化物たる機能は八戒以上に微弱である。居て

——西遊記私考——

孫悟空と

平和主義

成田有恒

も居なくても良いような存在。八戒ほどに露骨に慾望の角を出さないが、さりとて彼の善意も曖昧だ。盲目な、何か大衆の、市民の善意を愚ぼせる存在である。沙悟淨の隸屬的な姿勢は、案外絢らんなる悟空や八戒に乏しい善さと眞實さを語つていとも云える。

だが是らの三者は所詮は脇役。主人公はやはり三藏法師だと私は見る。私が西遊記に魅

力を感じている心の角度は、つまり三藏なる人物への傾斜を意味することになるのだ。

三藏は一見西遊記では如何なる役割をも果たしていないかの如くに思われる。悟空たちに守られて、危い瀬を渡りつつ旅を續ける非力なる師匠でしかないように見える。無論幻術を心得ている譯でもなく、女人國への渡河に際して、その水を呑み、八戒もろともに妊娠してしまふような凡夫の機能しかない人間なのである。妖怪變化に遭遇すれば鬭争の一切を悟空に委任しなければならぬ。非力である——それ以上に三藏にはどこか暗い、悲劇的な影がたえず付きまとつてもいる。

それは三藏の出生にからんでいゝのもあろうか。未だ母の胎内にある頃、兩親が故郷の旅からの郷途、賊に遇い、父は慘殺され、母は胎内の遺児を思つて奸賊の凌辱に耐え、月滿ちて生れた三藏を板にのせて流し、三藏が長じて、この母と邂逅した時、名乗りあつて後に自らの生命を斷つた——この母の宿命がこびりついていゝのであるかも知れないそれはともかく、然しこの暗さは復讐とか猜疑に充ちた黒さではない。その弱さはすべてを諦めた虚妄の果てと云うのでもない。暗さにはたえず一筋の光りが流れている。同時に非力な肉體の底流になつて強いある種の信念

が筋通つてゐる。それは絶對的な平和主義である。

三藏は幾度か、悟空の猛勇によつて救われる。然しその都度三藏は妖怪變化を殺したと云う理由で、この恩人とも云うべき愛弟子を非難叱責するのである。時には破門さえ云い渡している。悟空はぶりぶり怒つて「一人でゆけるものなら、いつてみる！」とうそぶく更に「自分が殺されるかどうかの瀬戸際にまで、殺生戒を守れなんて、そんなベラボーな話があるかい」と尻をまくり、正當防衛論を前面に押し出してせせら笑うのである。

まさしく悟空の言葉通り、妖怪變化との戦いは命を賭けた激しい勝負の世界である。負ければみんな化物の餌食になる。餌食になれば大乘經典もヘチマもない。人類の幸福のために經典を取りにゆくのだ、途次で化物の餌食になつてはならない、降魔の利剣を振つて摺伏させるのは當り前なことだ……名分はかくの如く歴然としてゐる。悟空の正當防衛論には筋道が通つてゐる。非力な三藏が悟空の妙術に救われながら、而も絶對平和を唱え、手段としての悟空の暴力をたしなめるのはジレンマとは云えないが、然し生命の危機の渦中で、隠れ場もない動亂の巷で、身に寸鐵をも帶びない丸腰で主張する平和主義は、裏付

けもなく論據も薄弱のように見えて、實は一番眞實の線に添つてゐるのではあるまいか。

私は思い出す。源平角逐の末路に、念佛一行を高唱した宗祖の精神の像である。更に郷土の同族の滅亡を眼の邊りに眺めつつもそれへ一指をも觸れず、心を惑わさず一筋に眞理の道を見つめていた釋迦如來のただずまいを思い出すのである。

妖怪變化が自己にとつて如何に危険な掠奪者であるかを熟知してゐながらも、彼らから身を守るためとは云え、振舞われた暴力を否定せずにはおられない三藏の心の支點が、私にはよく判るような氣がする。そしてその三藏法師に近い環境におかれた現實の自分たちを顧る時、共感の深度は一層深い處へまで届いてゆくような氣がするのである。

佛教が高唱する絶對平和主義は一見消極的だ。日和見的にさえ見える。意馬心猿の激しい渦に立ち向う時、機能に餘つた、閑雅なる理想主義のようにさえ思われる。人間の原罪意識を標榜し、唯一神の創造主の前に懺悔せる身を投げ出す、かの西の國の教えは花々しい。近代的な、ある意味での詩情をかき立てる方向へ人間を誘う魅力をはらんでゐる。それはそれとして、地味な非力な平和主義が人間の奥底深くに根ざしてゐることを、私はやはり氣ずかずにはおれないのである。

話は逸脱してきたが、正當防衛論を唱えて居直つた悟空が、結局の處、その都度師僧三藏のもとへ舞い來り、前非を悔いて許しを請う姿はどう考えたら良いのだろう。變化自在な、神通力を習熟した三匹の化物たちが、非力な三藏を慕つて旅を續けるさまは何ものかを暗示してはいないであらうか。

西遊記の面白さはこの三藏法師によつて表現された絶對平和主義だ——と私は終始を割り切る所存はないが、現實にある平和主義が殆んど何らかの權力を背景にし、力による見通しのもとに主張されているのを見るにつけふとこんな角度から西遊記の讀後感を考えて見たのである。そして盲目な、更に一層非力なる大衆が求める平和への欲求の圖を、隣國の古い奇書の中に見たまでのことである。

戦争中上映された上海電影公司の製作になる漫畫「西遊記」のラストシーンが未だに私の腦裏には鮮明に燒きついてゐる。難路の山坂を越え、遙かに天竺の都を遠望した同行の四人の姿である。馬上から小手をかざして大乘經典が藏される佛都を無表情で見つめる三藏法師、欣喜雀躍して金箍棒を振りながら先走つて驅ける悟空の小さな姿……新しい大乘經典がある佛國へ私たちは、いつ到達するこ

象^{ゾウ}

の

死

森

正

義

(本誌會友)

みなさんは今日、此動物園で象を見ましたね。長いお鼻をブラ／＼させてお芋をなげてやると「ナイスキャッチ」上手にそのお鼻で受けとめるし、パサツ／＼とうちわのように大きな耳。大きな身體に小さなやさしい眼。象は本當に可愛い、動物ですね。

この象は暑い暑い南の國シヤムから一日本の仲良しの子どもさん方に上げて下さい」と送られて來た象なんです。象はみなさんにあうのは生れてはじめてです。みなさんも象を見るのは生れてはじめてでしょう。

この象を見ていますと前に此動物園にいた花子という象の事を思い出します。花子は赤ちやんの時此動物園に連れて來られて子供さんを背中にのせて園内を歩いたり、ごぼんの上に乗つたり仲々上手に藝當をして、とても愛嬌者でしたので「花子」「花子」と動物園のおじさん達から大そう可愛がられて居りました。

戦争が段々はげしくなつてあつちこつちに焼夷彈や爆彈

が落されるようになりますと「動物園の猛獸は危険だから殺してしまえ」という命令が出ました。動物園のおじさん達はまるで自分の子供のように可愛がつているけどものたちをどうして殺せるでしょうか。殺すことは出来ません。一戦争はいやだな。こんな可愛い、動物まで殺さなくてはならないのだ。」ライオンが殺され虎が殺され錦蛇が殺され熊が殺されいよ／＼象が殺される番が來ました。

やさしい園長さんは仙臺の方へ疎開させようとされましたが、途中空襲があつて遠い東北まで運ぶことが出来なくなつてしまいました。警察からどうしても象は殺さなくてはいけないと言つて來ましたので私たちは相談しました。「何とかして花子を生かして置く方法はないだろうか」「それでも當局からあんなにやかましく言つてくるんだもの。やつぱり殺さなくてはならないだろうな」「かわいそうだね」「かわいそうだな」「どうしても殺さなくてはならないのなら、なるべく苦しめないように殺したいもん

だねー」―それでは毒を入れた餌をやることにしよう」という事になり象の大好きな餌に毒を入れてやることになりました。

大好きな餌を見ると花子は「待つていました」というようにあの長い鼻を廻しながら私たちに近づいて来ました。私は思わず胸が一ぱいになつて思わず餌箱を取り落してしまいました。花子はその餌に近づいて行きましたがもう見向きもしません。あのやさしい眼に涙を一ぱいにじませているのです。私は思わず花子の大きな身体にすがつて泣きました。―戦争が悪いんだよ。戦争はやさしいお前までを殺そうというんだよ―そうしている間にもB29のあの「ウン、ウン」という、うなり聲が聞えて来るのでした。敏感な花子は「ウオオゴオオ」どうなり聲を上げて警戒するのでした。花子は毒の入つた餌はとうとう食べませんでした。

またみんなが集つて相談した結果到々乾干しにする事になりました。人間の私たちも草のだんごを食べた頃です。一週間たちました。やさしい動物園のおじさん達はそつとないしよでお水やお芋を持つて行つてやるのでした。花子は段々元氣が無くなりそれから四週間目にとうとう息を引取りました。

だれもうらます本當にやすらかに死んでゆきました。私は手を合せて「なむあみだぶつ」とお念佛を唱えてやりま

した。此時何だか花子が笑つたように思われました。

もう花子の上手なごばん乗りも見ることが出来なくなりました。花子が死んでからさびしい／＼日が續いてとうとう日本はまけてしまいました。そして日本の軍隊がさんざん、ごめいわくをかけたシヤムのお友達が同じ佛教國であるというので、又日本にこの象を送つて来て下さいました。象は平和のお使いです。

戦争を捨てた國、みほとけ様の國、日本

象はいつまでもいつまでも長生きをしてみなさんのよいお友だちになつて呉れることでしょう。

ぞう

生れてはじめて見る

ぞう

アツ繪本で見たとうりだ

幼稚園のすべり台のぞうと

おんなじだ

はな

べんりだな

眼

ちつちやいぞ

ぞうは大きいけれど

やさしいんだな

みなともにつとむ

——第六講 完結——

竹 中 信 常

一、お禮を申し上げる

勤行の始めに當つて降臨をおねがい申した阿彌陀如來を
始めとした諸菩薩に、おつとめも無事に済み、いよいよお

歸りを願わねばならぬ、その前に、恭々しくお禮を申し上
げねばならない。これには大體三つの偈文がある。

三 身 禮

南無西方、極樂世界本願成就身阿彌陀佛
南無西方、極樂世界光明攝取身阿彌陀佛
南無西方、極樂世界來迎引接身阿彌陀佛

(21)

これをなす思ひは、しみじみと阿彌陀佛の威徳光明を心
に念じて、その廣大無邊の本願功德力にたよりすぎる（南
無する）にある。阿彌陀佛の他の佛にすぐれている所以は
その念願たる西方極樂淨土の建設を終り、既にその國に在
して、朝な夕な妙音を以つて有難い説法をなさつてゐると

いうことにある。これから佛様になるのではなく、これから
淨土を作るのでもない。さあおいでと手をひろげて極樂の
門口に立つておいでになる佛様だからである。だからまず
第一に、本願を成しとげた阿彌陀様に歸依するのである。
而も、そのお體からは普ねく大宇宙を照し輝かす大光明を

放つて、はるか此の娑婆世界で苦惱と汚濁に苦しむわれわれを救いとうとうとして下さるのである。これが光明攝取の佛なのであつて、二番目に光明攝取身に歸依しお禮を申し上げるのである。ところが更にありがたいことには、ただに極樂世界にあつてわれわれが往生するのをお待ちになつてゐるばかりでなく、時には、自ら極樂の門を出で、諸佛諸菩薩をおつれになり、紫雲にのつて、臨終に當つて、心を正し一聲のお念佛を唱え、佛の慈悲にとりすがろうとするものために、わざわざその枕頭にまでお出迎えにおいでになる。一紙小消息に「阿彌陀佛は不取正覺の言を成就して、現に彼國にましますば、定んで命終の時は來迎し給はん」と元祖上人のものさされてゐるのも、まさしくこの確信に立つてのことであらう。佛教には色々の佛があつて、

三 唱 禮

南無阿彌陀佛 三唱一禮

同じく佛の恩德を謝し、佛を讃嘆するにも淨土宗の教えの歸結たる稱名を以つてするのがある。即ち三唱禮というのがこれで、南無阿彌陀佛を三度唱えてその最後の念稱と共に禮拜し、これを三度くりかえすのである。

南無阿彌陀佛の名號には萬卷の經典を讀むにもまさる功

それぞれ偉大なる力と德とをお持ちになつてゐるのであるが、然し、自ら娑婆世界にまでおいでになつて、手をさしのべて救いを求める衆生をその手に抱きとめ、再び極樂世界にお歸りになるといふ、このように情深い佛は阿彌陀様を措いては外にない。來迎し、衆生を引接（連れ歸る）したまう阿彌陀佛。このように、本願と光明來迎との性格をお持ちになつてゐる阿彌陀佛こそ淨土念佛門の他に誇る佛なのである。佛の本願と、光明と、來迎とこの三つを信じこれを兼ね具えたまう阿彌陀佛に歸依し、深く々々頭をたれて禮拜するこれが三身禮である。日用念誦という本にある文といふことであるが、その本の所在は不明である。また後世の諸回向寶鑑という本にはこれとよく似た文がのせてあるとのことであるがいづれにせよ出典を明かにしない

德があり、特に臨終に於ける一念には彌陀來迎の薰力がこもるとはよくいわれている。いまここに勤行の終りにのみ、佛菩薩のお引取りをおねがいするに當つてのこの三唱禮は、宗是にかなつたものといふべきであらう。

三 歸 禮

歸佛得菩提、道心恒不退、願共諸衆生、迴願往生無量壽國
歸法薩婆若、得大總持門、願共諸衆生、迴願往生無量壽國
歸僧息諍論、同入和合海、願共諸衆生、迴願往生無量壽國

これは勤行の始めの方でする三寶禮に相應するもので、善導大師の往生禮讃に出て来る文である。一佛に歸して菩提を得、道心つねに退かず、願くば諸衆生と共に廻願して無量壽國に往生せん。」法、薩婆若に歸し、大總持門を得願くば諸衆生と共に……」「僧に歸し、爭論をやめ、同じく和合の海に入り、願くば諸衆生と共に……」「佛と法と僧の三つは佛教信仰のかなえの足であつて、いづれを欠いてもならない。ここに三つの寶に歸し、それぞれの利益を得て、無量壽國即ち彌陀の極樂淨土に往生せんことを願うのである。歸とは歸依のこと、南無と同義である。菩提は佛になる種子、更にいえば佛と同じく悟りを開くべき智、これをいう。道心とは修行の志、念佛不斷の決心である。薩婆若は一切智ということ、大總持門とは聞得せること悉くを憶して忘れざるをいう。即ち、法に歸依して一切の智を以つて凡ゆる教えをしつかりと記憶して行こうというわけである。最後の歸僧は僧伽即ち僧團に歸依し、争いごとを止め、廣くいつくしみ合つて行こうということになる。佛にねがつて成佛の種を頂き、教え受けたものを悉く憶

持し、衆と和合して生活してゆく、そこに淨土宗徒としての當然の願いは、彼の國に生まれんことである。但し、佛教はあくまでも同信同行である。自分一人が生まれればよいというのではない。身は等しく凡夫であるとも倦くまでも他人の救いをも常に心につけ、折にふれ、時に臨んで共に願う。佛教の博愛主義がここにも見られる。

迴願とは廻向發願ということ省略したもので、此世に於いてなした一切の善いことをめぐらし、これを土臺として、西方淨土に往生しようと願うのである。一縁なき衆生は度しがし」で、いくら佛でも全然信仰心もないものに對しては救いの手をさしのべられない。いやさしのべられていても、これに氣がつかぬのである。だから、どんな惡人でも凡夫でも、願いさえすればよい。一意ある處必らず色に現わる一で、願いの心が片鱗でもあれば、それが聲に現われて念佛となる。念佛の聲する處、必らず佛は來りて救いたまうのである。信心とは願心でもある。ことに廻向發願心が大切となつて来る。

お禮の言葉を申し上げるにしても、相手が佛様なのだから

ら、なまじ普通のお禮の言葉などでは到底盡しようもない。人間の小さいはからいをたくらむよりは、むしろ素直おに、再び改めて、佛の御名を唱えて三禮するのによし、

二、お送り申上げる

送 佛 偈

諸佛隨緣還本國
願佛慈心遙護念

普散香華心送佛
同生相勸盡須來

この文は法事讃にある。「諸佛縁に随つて本國に還る。

普ねく香華を散じて心に佛を送る。願くば佛の慈心、はるかに護念したまえ、同生相いつとむ、盡くすべからく來るべし」と讀む。但し、冒頭の諸佛を請佛とする場合もあるが、正しくは諸佛である。

長時間にわたる勤行も終つた。諸佛菩薩は再びその國に御歸りになる。よつて道場にひろく香華を散じて心からお送り申し上げよう。佛の慈悲心をたのみ、そのお護りを得て、諸衆生皆相いともにつとめはげみ、すべてが佛國に往生せんことを願いつつ。ここにもまた他と共にという精神が浸み出ている。

いくらつとめはげんでも、一人切りでは佛道は完全しない、前面の四弘誓願にもあるように、自他法界同利益であ

その御身の不可思議功德を讃美するのによし、三寶に歸して無量壽國に往生せんことを願うもまたよい。

る。キリスト教の神は人間がいなくても、それに關係なく天に在ましておられるが、佛教の佛は倦くまでも衆生と共に、いや衆生がいるからこそ佛となられたもので、決して衆生を置ざりにしたり、ないがしろにはされぬ。佛となるには無論自らの修行も必要だが、それと共に、他をして佛道を成ぜしめることも不可缺である。自利と他利とは表裏一體であつて、いづれを缺いても佛とはなれぬ。いかに念佛易揭の淨土門でも、矢張り佛教である以上、このことを無視するわけにはゆかない。同生相勸であり、盡く須らく來るべしでなければならぬ。一人丈けが行くのでは本當の往生ではない。

本稿を成すに當り、二三の出典、訓讀その他に關して阿川貫達先生の御教示を添けなくしたことを附記してお禮の言葉とする。

◇新入會申込の方々に◇

法然上人鑽仰會は、申込によつて何時からでも、誰でも入會し、月刊信仰雜誌「浄土」の配布をうけることができます。

◇本會は、浄土宗祖法然上人が示された念佛信仰をいまの生活の中にふかめてゆくとともに、更にひろく社會に正しい信仰をたかめてゆくために結ばれたものです。

◇會の目的をたゆまず達してゆくために、毎月「浄土」を刊行し、會員に配布し既に十六年に及んでいます。世間の出版界が流轉の姿を辿つてゐる戰時、戰後を通じて、「浄土」はつねに着實に歩んできております。浄土の歩みはとりもなおさず、正しい信仰に生き抜いてゆく會友の方々の歩みに他なりません。

◇その他、本會では眞に心の伴侶となる圖書の刊行頒布、講演會、座談會などの事業を行うとともに、多くの人々と廣く手を携えてゆく上から、會員の申込によつて講師の紹介派遣もいたします。

◇會員となるには、半年一三八圓または一年二七六圓を添えて申込まれる他には別に手續を必要といたしません。申込には振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

◇會員は浄土に投稿することが出来ます。但し採否は編集部にお任せ願います。

芝園だより

◎藤田編集長、青葉の旅に出る。
その留守を囑つて、編集とともに久々に、後記の筆をとる。白雲が悠々と北に飛ぶ初夏の空。無心に眺めるその雲が、いつ何時恐ろしい「原子雲」に變るかも分らぬ現實のきびしさ。この心と物との二つの世界を、ゆるぎなく、しつかりと結びつけるには、ただ「浄土」の精進あるのみ。

◎「皆さんの浄土」これをモットーとして、今月もまた内容の豊かな味の深いものをお届けしました。「信仰一本」これが私共の道です。佐山先生が死に臨む人々の心をお傳へするもの、藤井先生がわが身の生死に迷う悲しみを説いていられるもの、むべなるかなと存ぜられます。

◎吉田先生の隨想に對して毎々多くの協鳴を得、特に「悟りの心、悟らぬ心」は山本博士の自省録と共に多數の反響を得ました。先生方に厚くお禮申します。どうか本月の「一碗の茶」も充分に味わつて頂きたい。

◎勤行講讀について、三部經の解讀を企畫しています。御期待下さい。（竹中）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下さい。れば、着次第御送本申上げます。

「浄土」 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿五年五月二十五日印刷
昭和廿五年六月 一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

東京都千代田區神田神保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

佛教儀式を現代に生かそう！

在來の法要に現代的センスなし
すべからず情味と悲哀とをこめ
聞く者をして心から慟哭せしめる
切々たる諷誦文をよむべし

新撰 諷誦文集

美麗鳥の子紙折本・謄
寫印刷・十種所收・一
冊二百圓・送料三十圓

難解冗長な在來のものを
平易にして而も感銘深きものと
本會苦心の結果成れる
本文集を是非御使用下さい

法話より魂に訴える力を持つ！

發行所 東京都品川區上大崎一丁目日本願寺内

新佛教青年會

振替東京八七六六一番

取次所 東京都港區芝公園五の十

法然上人鑽仰會

淨土トラクト近刊豫告

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが氣輕に手にできる廉價——淨土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられ、續刊の要望が多いので、次のような企劃で順次に新刊いたします何卒御期待下さい。

お十夜の話

藤田寛雅著

四圓送六圓
既刊賣切

お彼岸の話

竹中信常著

五圓送六圓

お盆とおせがき

近
一部五圓送六圓刊

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會